

彙報

●京都帝國大學文學部史學科國史

專攻學生研究旅行

去る六月の末大阪河内大和飛鳥地方に行はれた研究旅行は三浦教授中村助教授の指導の下に、二十八日午前九時大阪城址の見學から始まつた。一行二十三名。師團附參謀秋永大尉に案内されて紀州御殿に行き着く。こゝは昨春 聖上陛下大阪に行幸の砌、御駐泊所に充てさせられたもので、當時の御調度用具の類が、その儘現存されてある西廊より庭上に降りる。公園とするため市に貸下けられた庭園を通り今春甲冑の發掘された西北隅に到る。こゝにて秋永大尉は當時の築城術の一斑を説明さる。

北に回り京橋口にて淀君秀頼母子自刃の跡を弔ひ、金藏、銀水、金水を見たが、天守臺は目下市の手によつて天守閣再建中のため上れなかつたのが遺憾であつた。天守閣は外觀五層、内面八層の鐵筋混凝土建の壯麗なもの

であるに聞く。その模型を見ても完成の暁は大大阪の偉觀なるだらうと思はれる。同設計は天守閣炎上の際の屏風繪と福山城を參考にしたものである。十時半辭去四天王寺に向ふ。

四天王寺にては寶藏にて寶物を觀る。數多の古文書繪畫の中にて見るべきものは何と云つても扇面法華經が壓卷である。扇面の形をしたもの、中央から折半して粘葉をしたものであらうといはれる。全部で三十九面。明治十九年國寶となつたものであるが、その以前は扇面形の漆箱に納められてあつて、雜僧が時折の眠氣覺しに見てゐたに云ふ面白い挿話のあるものである。國寶に指定さるゝに及んで、その保存法を講じ、美術學校に囑して硝子板にて兩面を挟み、真空にして封じ濕氣を防いであるが、現在では既に内面に曇りが生じてゐるのを見て一段の工夫がありたきものと思つた。兩面に經文を書いてあり、無量義經、妙法蓮華經卷六、同卷七、法華經如來神力品第二十一等があり、裏面は經文のみであるが、表面は極彩色の美麗なる版畫になつてゐる。從來版畫である

こは知られなかつたが、十七八年前裏面に『佛告阿羅締  
聽諦云々』とある一面の表面の彩色が脱落して、唯輪廓  
の線のみが残つてゐた所から推して版畫の事實が發見さ  
れたといふ。金銀粉胡粉を用ひ、特に紅の色澤なまは到  
底現在では求める事の出来ぬ様な鮮明高雅なもので、當  
時にあつても大陸より輸入したるものを用ひたものであ  
らうと思はれる。又烏帽子と黒衣とに當る部分の經  
文の文字は金文字になつて繪と經文との識別を易からし  
めてゐる。柳に舟を配し宮女を乗せて金銀粉を以て彩色  
したもの、芦の籬に女官が紅葉の枝を持てるもの、當時  
の商家の狀況を描寫せるもの、胡粉を以て雪とし、簾の  
蔭に女官の座せる雪景色等美麗巧緻の筆法にて描いてあ  
るが特筆すべきは「法而諸衆生云々」とある一面等の、全  
面墨流しを施し之を利用して雄大なる山水畫したもの  
なまであつた。

文書の中には四天王寺主務忍性菩薩解狀がある。「敦賀  
津の升米は正應四年から六箇年間祇園社に寄せられ以後  
十箇年西大寺に寄せられて四王院の修造料所とする云

々」この意味ある永仁四年十一月附の解狀であつて、忍性  
の筆になつた解狀なる事は、疑を挿む餘地がない。

二十五三昧私記一卷は青蓮院主尊鎮法親王の筆なりと  
言ふのであつて、井上勘三郎なる人から四天王寺に寄附  
したものであり、蓋の裏にも有御判並極札とあり、尊鎮  
法親王の筆になつた事は確かだと思はれる。

橘守國筆四天王寺圖は三幅より成り四天王寺の完全な  
る全景を描いたもの、江戸中期に成つたものと思はれる。  
圖によれば五重塔も東西二つ乍ら存し、太子殿、金堂、  
講堂以下の堂塔の完備した大伽藍を現出してゐる。特に  
面白く感じたのは、圖に大阪道として同寺より北走した  
道を描いてある事である。現在四天王寺は市の中央部繁  
華な地域を占めてゐるが、此圖の成つた當時はまだ大阪  
とは明瞭に區別せられてゐた事である。大阪市發達の好  
參好史料たるを失はないであらう。

寶物の見學終つたのが一時少し前、引續いて寶物館に  
到り陳列品を參觀、傳土佐光信筆の太子繪傳六幅が光つ  
てゐた。

本坊に歸つて晝食の後同寺を辭去し、南海電車平野線により平野着、平野郷町の舊家末吉勘四郎氏宅に向ふ。

古風の落着いた宏壯の建物に世々土豪として、海外貿易家をも出し、又町年寄の世家でもあつた昔の面影が偲ばれる。

同家所藏の文書の中にて、最も古きは頼朝が源光清を攝津武庫庄小椋の下司及公文職に補任した壽永三年五月十八日附の補任狀で頼朝の鮮かな花押が見える。

平野庄は自治の行はれた土地にて、天正元年十二月廿一日附の衆議狀は平野庄の自治體に就ての決議をしたものであり、平野庄年寄血判起請文は寛永四年十一月十九日より始まり、同庄の年寄に推された人々の起請のための血判狀である。

秀吉書書狀には天正十四年八月十六日附で末吉勘兵衛を河州丹北郡布忍村千石代官に任じたものがあり、天正十六年九月廿一日附勘兵衛宛に營業税を免許した朱印狀がある。

内國航路の免狀としては天正十六年八月四日附上杉家

の印ある末吉勘兵衛宛のものがある。

慶長五年家康禁制は關ヶ原合戰當時のものである。平野一帶を治める末吉家が同方面の敗軍の爲、害を蒙るを慮つて下附を願つたもの、合戰は九月十五日に畢つてゐるが、この禁制の日付は九月廿一日附になつてゐる。

慶長十九年家康禁制は大坂冬の陣の前既に東軍より下附せられたものである。日附は十月廿九日附、源家康弘忠愆の方約二寸五分の朱印がある。反對側の秀頼側の禁制としては慶長十九年十月廿六日附のものがある。

別に長井宗左衛門長重覺書がある。長重は末吉勘兵衛を助けたる人で、この覺書は慶長十二年より寛文十二年に至るもの、平野庄を中心として大阪その他の地との關係を年代順に記載したものである。

外國貿易に關したのものには安南の德隆四年五月二十五日(寛永九年)附のもので、安南答禮目録がある。末吉家よりの進物に對する答禮の進物の目録である。

暹羅渡航朱印狀は『自日本到暹羅國舟也』とある次に、慶長十三年戊申孟秋二十五日の日附があつて、最後に源

家康弘忠恕の家康の朱印のあるものである。

平野郷繪圖は元祿七年九月に柳澤出羽守家臣富田仁兵衛に寄贈したものである。郷の周圍に濠を廻らし、地割も略基盤割によく出来てゐる。宛ら一城郭を形成し要所々々に木戸を設け、その北部に周圍に濠を廻らせる末吉邸があり、堺と共に自治を以て治めた同郷の外貌が察せられる。

その他、末吉勘兵衛畫像、末吉孫左衛門畫像は畫像の好標本であり、三好義繼、徳川頼宣、同義直、伊達政宗、前田利家、福島正則、土井利勝、本多忠勝、僧崇傳等よりの書狀は末吉家と中央要路の人々との交渉を偲ばせる。

觀應二年五月十七日附の直義の禁制は神宮寺宛に下したものの、「神宮寺」の三字のみ墨色筆勢が異つてゐるのは澤山用意された禁制の中から請に應じて請求者の名を入れて下附したものと思はれる。直義の花押のあるものでこれは平野郷町杭全神社の所藏である。

同家古文書の見學を終り、一同杭全神社、及末吉家舊

邸跡を見て、再び末吉家に歸り一行思ひがけぬ饗應に預つた後七時過、折からの驟雨の中を大鐵により當麻寺に向ふ。

當麻驛に下車。闇路を辿つて八時過與院宿坊着。晚餐後與院の襖繪その他を觀、終つて懇談に刻を移して十一時過就床した。

二十九日は午前七時先づ與院の寶物を見學した。

法然上人像は當麻寺與院の本尊として安置せるもの。

上人十二代法孫誓阿の彫刻になれるものと傳へ、元、知恩院にあつたのを此の與院に移したもので、當麻寺が元真言のみであつたのが、之より真言淨土の二宗になつた所である。觀經曼荼羅は、本堂本尊とせる文龜曼荼羅の復本であつて、恵心僧都の筆になると言ふも、足利時代に成つたと思はれる點が多い。

與院を辭し本坊に至り曼荼羅堂(本堂)、講堂、金堂を順次見學した。

曼荼羅堂(本堂)は白鳳年間河内國交野郡山田郷より移建されたものと言ふが、後世諸所を修繕の爲、僅に雄大

な趣を見せるのみで鎌倉風の建方が明に看取される。

文龜曼荼羅は本堂の本尊として安置せられる。古曼荼羅の複本であるに拘らず、却つて文龜曼荼羅が國寶に指定されてゐる。法橋慶舜、專慶の筆と言はれ銘文は後柏原天皇が文龜三年宸寫し給ふ所である。原本の古曼荼羅は折柄の梅雨期のため見る事が出来なかつた。須彌壇は黒漆螺鈿で唐草模様があり、金物に寛元元年五月日尼眞蓮の銘があるが、擬寶珠には淨慶妙仲天正十一年癸未時正二月六日とあり、一部修復の跡が窺はれる。講堂は乾元二年に再建せられたるもので、四柱の本瓦葺のもの。阿彌陀如來坐像は金色の木彫であり、講堂の本尊として安置す。藤原末期の作と思はれる。吉祥天立像は崇高な感じのする像であるが、特に光背の簡素なのが此の像の清純さを強調してゐる。彩色は殆ど剥落してゐる。弘仁期の木彫。妙懺菩薩立像は簡素な衣紋が佛體を輕やかに流れて立體感を豊に現した弘仁期の木彫である。

その他、鎌倉時代の地藏菩薩立像。藤原時代の木彫の十一面觀音立像。鎌倉時代の千手觀音立像がある。

金堂は正中三年の修造である。柱に文永の榮書のあるが面白い。彌勒菩薩坐像は金堂の本尊であり、高八尺塑像乾漆混用像である。四天王立像は多聞天を除く三像は天平時代のものであつて、木心乾漆像である。作者不明多聞天は鎌倉時代に補作されたもので木彫である。彌勒像の兩側に二體宛並立してあるのが珍しい。

東塔、西塔は白鳳時代との説もあるが、先づ和銅天平頃の創建と見るべきであらう。只昔乍らに兩塔の存してゐるのはこの寺の誇である。軒深く屋根の勾配緩やかに相輪と塔身とが美しい比を保ち、雄壯な感じを抱かせる。梵鐘は日本現存の梵鐘中最古のものと言はれる。白鳳期のものである。

午前十時當麻寺を後に萬葉古蹟研究家辰巳利文氏の好意に依り、その東道を得て飛鳥地方に向つた。吉野電車岡寺驛着。自動車を雇うて飛鳥地方の史跡を巡覽の途に上つた。

萬葉ケ池古墳は畦道を辿つて小丘の中腹にある。夫婦合葬塚で古くより發見せられたもので、手前の石棺中の

ものは盜掘されてある。凝灰岩を用ひてあるもので、誰の塚とも判明せぬが、多分皇族の塚であらうと言はれる。

川原寺は一名弘福寺とも云ふ。齊明天皇以前の創建である。今は一草堂が野中に淋しく立ち往古の大伽藍の礎石二十餘個を存するのみである。礎石は方形の白瑪瑙で唯昔の川原寺の位置の一斑が知られるが、その外廓を詳にする由がない。その三町四方が史跡指定地になつてゐるが、その以外にも及んでゐると思はれる。發掘さるゝ瓦片は白鳳時代のものである。同寺の佛像は四天王中二體のみで何れも弘仁期のもので國寶である。

聖徳太子が橘寺にて勝鬘經を講ぜられた時、蓮花の降つたさいふ太子に由緒深き同寺は相當美術品も數多く藏せられてゐたが、法隆寺建立に及び目星しいものは殆ど法隆寺に持ち去られたらしい。畝割塚と言つて方五六間の大石があり、大寶令にある尺度の標準となり一反の十分一を象つたものであると云ふ。

俗に石舞臺と云ふ露出石礫は小字池田にある。往古馬子島大臣と號し此の附近に宏大な邸宅を構へてゐたものらしい此附近一帯が飛鳥宮の内最も古い京址で、漸次北

方の低地に京趾が移つて行つたやうである。

岡寺は龍蓋寺と稱し眞言宗に屬してゐる。天智天皇二年岡本宮を以て義淵に與へ伽藍を建立したのに始まる。

如意輪觀音はその本尊として安置された丈六の塑像であり、僧空海が三國の練土を以て作つたと傳へられる。塑像として本邦最大のもので、唇の朱が佛體の胡粉を好く對象してゐる(國寶)。龍蓋寺に刻せられた古額は、一部分免除せるがために、國寶に指定されなかつたと云はれる。天武天皇の宸翰と傳ふるもそれより後のものらしい。涅槃像は、中空の長五尺位のもの(國寶)。弘法大師作と傳へるが弘仁より少し以後のものらしい。

飛鳥小學校北側を掘つた時、その石疊らしいものが現れ、飛鳥淨御原宮址と觀測されたが、前々日來の豪雨のため水溜となり、残念乍ら檢討する事が出来なかつた。それより推古天皇豊浦宮趾を通り元樂師寺に至る。

元樂師寺は天武天皇白鳳九年皇后不豫にてその誓願のために建立せられたもので、その東塔の礎石は昔乍らに存してゐるが、西塔の礎石は散逸して存しない。後生駒郡郡跡村に移されたが、東塔の礎石より見て、柱は角柱

であつた事が想像される。

見學を終つた一行は自動車を驅つて、樞原神宮前に至り、神宮に額づいた。二日に亙つて殺人的な太陽の直射豪雨泥濘にも屈せず古跡を尋ね古文書類を見學して各自の研究慾を十二分に満足させた一行はこゝで惜くも袂を分つて東西に解散した。〔宮田〕

# 會報

## 寄贈交換圖書

- 民俗學 二の六、七、八
- 人類學雜誌 九の一
- 社會學雜誌 四五の四附録、四五の六―八
- 東洋學報 七四、七五、七六
- 龍谷史壇 一八の三
- 經濟論叢 三一の一、二、三
- 日本研究 一
- 宗教と藝術 一一の三
- 史苑 四の三、四、五
- 史學雜誌 四一の七、八
- 史蹟名勝天然紀念物 五の七、八
- 刀劍研究 一六の七、八

- 民族發行所
- 三田史學會
- 東京人類學會
- 日本社會學會
- 東洋協會學術調查部
- 龍谷大學史學會
- 京都帝國大學經濟學會
- 早稲田大學日本學協會
- 宗教と藝術社
- 立教大學史學會
- 史學協會
- 同保存協會
- 南人社

- 史學研究 二の一
- 京都史蹟 一の六
- 考古學 一の四
- 考古學雜誌 二〇の七、八
- 言語と文學 三
- 民俗 一の七一〇
- 廣島史學研究會
- 京都史蹟會
- 東京考古學會
- 考古學會
- 台北帝國大學國語國文學會

- 語原歷史學研究所週刊 一一七―一二三、一二五―一二八
- 國立中山大學

- 歷史地理 五六の二
- 朝鮮學報 一の一
- 成鏡道及び黃海道の方言
- 近代日支關係の研究
- 御成敗式目研究(植木直一郎著)
- 日本文化史概論(西村真次著)
- 莊園目錄(八代國治編)
- 日本歷史地理學會
- 朝鮮學報社
- 京城帝國大學法文學部
- 同書店
- 岩波書店
- 東京書堂
- 八代恒治

## 會員勤靜

### 圖入會

- 京都市北白川久保田町四二澤田方 武政 治氏
- 仙臺市東九番町十五東野方 内田 勸氏
- (右紹介者 島田貞彦氏)

### 圖逝去

- 横卷茂雄氏 鹽谷鴻氏
- 右謹みて哀悼の意を表す